

「ことばの教育」パイロット校事業 報告書

学校名	広島市立城山北中学校
校長名	佐藤昌史
所在地	広島市安佐南区八木五丁目3 4番1号
H P	jouyama-n-j@e.city.hiroshima.jp
学級数	15 (障害児学級2含む)
タイプ	.

1 研究の概要

(1) 研究主題

「全教育活動を通して、基礎的な学習の力として、ことばの力を育てる」

(2) 研究のねらい

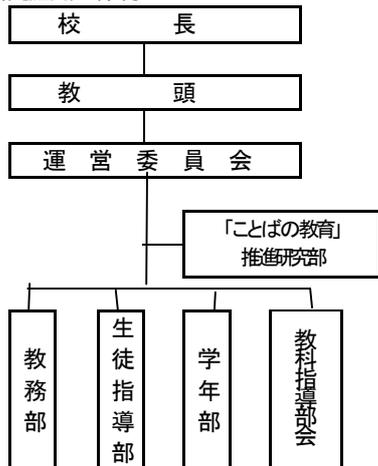
「ことばの力」に関する本校生徒の実態  
 教師の説明を集中して聞き、指示を理解する姿勢は育ってきている反面、できない生徒が固定化している。意見発表は積極的にできる生徒もいるが、発表者が限られている。  
 グループによる話し合いが実践的なものになっていない。視写の取り組みを継続してきたことによって、全体的に書くことへの抵抗感は少なくなった。ある程度の速さで板書を書き出すことができる。  
 教科書の音読を大部分の生徒が抵抗なくできるが、声の小さい生徒やうまく読めない生徒がはっきりしている。事実と意見を分けたり、根拠を明確にして筋道立てて述べたりする力が弱い。

このような実態から生徒の豊かな学びを創り出し、学力の確実な定着を図るために、ことばの力の育成が重要であり、特に基礎的な言語技術を習得させることが、教育活動において急務であると考えた。

・研究仮説

全教科・全領域で重点目標や取り組み計画に基づいて言語活動を効果的に取り入れ、具体的な指導を工夫すれば生徒の言語技術が向上し、学習する力が育つであろう。

(3) 研究組織・体制



2 2年間の取組みの概要

(1) 2年間の主な活動内容

平成17年度	内 容
5月	校内研修会(「ことばの教育」に関して)
6月13日(月)	校内教科研究授業

7月	1学期成果収集
8月2日(火)	小中合同研究会
8月8日(木)	校内研修会(「ことばの教育」に関して・言語技術演習)
8月25日(木)	小中合同研究会
9月	アンケート調査(県教委)
9月28日(火)	公開授業研究会(道徳)
10月11日(火)	小中合同公開授業
11月	校内研修会(「ことばの教育」に関して・言語技術演習)
12月	アンケート調査(県教委)・2学期成果収集
2月	CRT教研式テスト・アンケート調査(本校評価委員会)
3月	年間成果収集・各教科指導事例作成

平成18年度	内 容
4月6日(木)	職員会(「ことばの教育」パイロット校事業概略説明)
4月26日(水)	校内研修会(「ことばの教育」概要説明、言語技術演習)
5月12日(金)	「ことばの金曜日」開始
6月12日(月)	道徳授業研究会(全学年道徳研究授業)
7月	1学期成果収集
7月31日(月)	小中合同研究会(教科等研究会)
8月1日(火)	校内研修会 言語技術演習
8月21日(月)	校内研修会 研究協議 アンケート調査(本校研究部)
8月22日(火)	小中合同研究会(教科等研究会、指導案検討会)
8月23日(水)	学校力の向上を目指した実践研究合同発表会(市立大学)
9月~10月	「ことばの教育」強化月間
9月22日(金)	県パイロット開発会議(英語科研究授業)
10月11日(水)	小中合同公開授業(音楽科・技術科研究授業)
10月12日(木)	校内研修会(ことばの教育に関して・指導案検討)
11月7日(火)	公開授業研究会(国・社・数 研究授業 分科会・講演会)
12月	「ことばの教育」アンケート調査(県教委)
12月~1月	2学期成果収集・各自指導事例作成
3月	指導事例集・研究紀要作成

(2) 取り組みに当たって

具体的な方策

- ・国語科、「ことばの金曜日」の取り組みを中心に全生徒に「言語技術」を定着させる。
- ・各教科で「言語技術」を取り入れながら、教科のねらいを達成させる授業づくりに取り組む。

取り組み方法

- ・全教科・領域で主題に基づいて取り組む。
- ・年間指導計画作成の際、「言語技術」をどう取り入れて行くかを考えて計画し、実践していく。

- ・授業研究を行い、全体で研修する場を設ける。
- ・指導事例を持ち寄り、授業実践交流を行う。

(3) 具体的な取り組み事例

**言語技術の研修**

パイロット教員を中心に年間2回以上、演習を伴う研修会を実施する。また、研究協議を重ね、教科内・教科間での取り組みの交流を活発に行う。

**言語技術の導入**

国語科の授業（平成17年度）や「ことばの金曜日」（平成18年度）を通して、生徒に「言語技術」を習得させ、各教科の授業で活用できるようにする。

また、授業以外の場面でもわかりやすく相手に伝わる話し方を意識した指導を全教職員で指導する。

**授業研究と実践交流**

年間2回の授業研究会を中心に、指導案検討・研究授業実施（参観）・研究協議等を全教職員で取り組み、実践交流を深める。年間2回の授業研究会は、各学年で行う道徳の研究授業と各教科で行う研究授業の二本立てとなっている。

**指導事例作成**

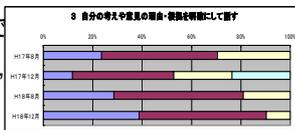
各教科で「言語技術」を取り入れ、教科のねらいを達成できる研究を続け、2年間の研究の集約として授業実践を指導事例として集約する。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

**教師の変容について**

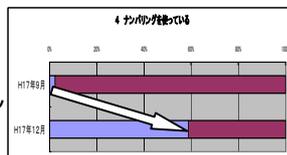
パイロット校事業初年度（平成17年度）は、校内研修で「ことばの教育」の理解に取り組み、「言語技術」を習得した結果、全教員がその必要性を実感した。その結果、日常のことば、言語環境への意識が高まり、生徒に対して統一した指導が多く見られるようになった。前出の職員室や保健室での用件の伝え方、授業での発表の仕方などがそれに当たる。また、生徒に指導するだけでなく、教師自身も自分のことばに注意するようになり、正確でわかりやすい説明や的確な発問を心がけるようになった。右のグラフで



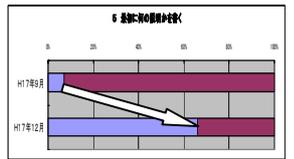
定期的に回答が2年次の12月には教職員の90%を超える結果となっている。まず、自分の話し方を改善する意識改革ができたことが研究推進の大きな原動力となったといえる。さらに2年目の平成18年度は各教科の年間指導計画に「言語技術」をどのように取り入れるかを考えることで、「ことばの教育」を系統的に指導できる下地作りができたことを考える。各教科の授業において、「言語技術」を効果的に取り入れ、教科のねらいを達成できるような授業構成を意識するようになった。

**生徒の変容について**

昨年度、生徒に言語技術を導入し



た際の実態調査の結果が右のグラフである。問答ゲームにおいて「ナンバリングを使っている」生徒や、描写において「最初に何の説明かを書く」ことのできる生徒は、指導後では明らかに違う。当然のことではあるが、生徒にわかりやすく伝えるために何が必要かという指導をすれば、その技術は定着し、応用して使いこなせるようになるのである。事実、生徒はナンバリングを、小論文・進路面接での受け答えなど様々な場面で応用していた。



また、昨年度、今年度計3回にわたって実施した生徒の意識調査によると、どの項目に関しても向上が見られる。言語活動の中に相手意識が芽生え、よりわかりやすく自分の考えを相手に伝えるために理由・根拠を明確にする必要があることを実感した結果だと思われる。他にも、全体的に丁寧に書いたり、答えたりしなければならぬという意識が出てきたため、思考力を問われる発問に対しても、自力で答えを出し、文章化しようとする生徒が増えたということが各教科での定期テストの結果でも明らかになってきている。

(2) 課題

昨年度、今年度と「ことばの教育」の取り組みを続ける中で、「言語技術」を日常生活に取り入れる指導は定着したと言えるが、各教科での「言語技術」の取り入れは、二年次の現在でも十分であるとは言えない。原因としては、「言語技術」の研修不足により、各教科のねらいにどのような「言語技術」が効果的か絞り込めないこと、さらに教科間での関連性、系統性が不十分であることが挙げられる。

また、生徒の側では、伝えるために「言語技術」を取り入れることは定着した。しかし、表面的な受け答えの定着にとどまり、論理的な思考力や読解力につながっていない現状がある。平成17年度、18年度の基礎基本定着度調査（国語科）においても、県平均通過率に対して本校平均通過率は特に「読むこと」の領域が低い。国語科のみならず、各教科における論理的思考力や読解力を高める授業展開が、まだ不十分であること、教科間での系統性がなく、各教科でバラバラに単発的に取り入れていることなどが原因としてあげられよう。言語技術をわかりやすい伝え方をするための一手法としてだけでなく、論理的思考力や読解力を育むための根幹をなす考え方として、今後いっそう各教科での授業展開の中に効果的に取り入れる必要がある。そうすることで、生徒に論理的に考える姿勢がついてくるとと思われる。

平成17年度・18年度 基礎基本定着度調査 国語科

基礎基本調査	聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項
平成17年度	54.3%(50.4)	91.0%(84.2)	59.1%(64.4)	76.7%(78.1)
平成18年度	76.6%(81.5)	82.4%(85.1)	69.1%(73.2)	83.2%(86.3)

太字 = 本校平均通過率 ( ) = 県平均通過率